

六ヶ所村立郷土館 企画展

郷土を拓いた人々

～泊湊は、人とモノの交差点～

1 フノリカキ:磯に付着している「フノリ」を採るときに使う道具。



2 テングサトリ:ところてんをつくる材料の天草を採る道具。



3 アワビヤス:丸木舟から箱メガネで海底のアワビを見て突いてとる道具。アワビは3本ヤス。



4 アワビタモ:ヤスで突いてとったアワビを入れた道具。



5 アワビカギ:岩場のアワビをひっかけてとる道具。



6 ウニヤス:ウニを突いてとる道具。ウニは4本ヤス。



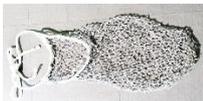
7 ウニタモ:ヤスで突いたウニを入れた道具。



8 ウニ樽:カゼ(ウニ)の身を入れた桧木製の樽。乾燥した昆布を敷き、塩ウニを入れ、蓋をして密封した。



9 コシヤズカリ:腰に結び付け、とったアワビやウニを入れる道具。



10 タコバケ:針が4本ついたタコ針で、箱メガネで水中をのぞいて引っ掛けてとる道具。



11 マスバケ:マス(鱒)を釣る道具。1月から3月までの、引き縄の一本釣り。



12 エサマキ:カツオ釣りのエサ(イワシ)をまく道具。大正時代。



13 メフントリ:カツオの中骨に沿って付いている血腸(腎臓:メフン)を取る道具。塩辛にする。



14 包丁:カツオをさばくときに使った包丁。



15 箱メガネ:海の中をのぞいた道具。ガラスといった。



明治20年(1887)代から使用。

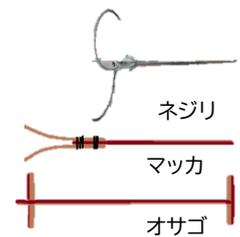
16 アカトリ:船にたまった海水(アカ)や雨の後の雨水を汲んで船外に捨てる道具。



17 ネジリガマ:先の鎌で刈り、ワカメをからみつけてとる道具。



18 ネジリ:コンブを引っかけてとる道具。同じ道具に、マツカ、オサゴがある。



19 カメノコイシ:網のバランスを保つためのオモリ(沈子)。石を固定するため、麻ひもで丹念に包むように編んでいる。新納屋遺跡からは、約9千年前の石の錘(石錘)が出土している。



石錘(せきすい)

20 セトアシ: 網の下につけて、網を沈めるための陶器製のオモリ(アシ:沈子)。コンクリート製もあった。石が古来より用いられていたが、鉄、さらに鉛や陶器製に変わってきた。



21 アバ: 網を浮かせるための浮(アバ)。桐や杉材でつくった。



網を設置する時は、アバ(浮子)とアシ(錘:沈子)で調節する。その後、ガラス球から合成樹脂のものが出た。



ガラス球

22 アバリ:網を修理する時の網針(アバリ)。



23 アバリイレ:網針(アバリ)を入れる麻袋。



網は、蛙又結びで編む。



24 ガワ: 麻糸を巻き付けて置く道具。大正時代に綿糸から麻糸となり、昭和30年ころからナイロン製になった。



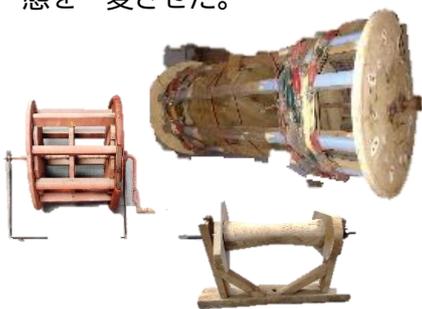
25 3 本ヤマデ:昔は、浅い所のイカはヤマデで釣った。これは深い所のイカを釣るための道具。浅利式で、1953年から使用。後にドラム式となる。



26 イカ釣り船。青東丸模型。パラシュートアンカーを海の中に沈めることによって船の先端を誘導し、波の流れで船の転覆を防ぎ、魚の流れに沿って船を動かし漁をおこなう。昭和40年代までは19トン未満の動力漁船で、昭和42年に7隻の30トン以上の大型漁船が出現。八戸港の他に全国の漁港を拠点に操業の近代化も進められた。



27 ドラム式イカ釣り漁具:昭和33年(1958年)頃、開発され個人差がなくなる。船には14,5人乗りこんでいた。その後、昭和43年(1968)、泊に全自動イカ釣り機が登場し労働者不足を補い、漁業操業形態を一変させた。



撮影者:目代健三氏

28 ハネゴ:海面のイカを針で引っかけて釣る道具。上手な人は、2本のハネゴを使った。



29 竹籠:魚などを入れて運ぶ竹製籠。昔は、山から竹をとってきて、各家々で編んだ。漁の後、各家への分け前を籠で量った。



30 モッコ:魚などを入れて運ぶ杉材製の背負い箱。北海道や泊での呼称。昔は桧木製のショイ桶で、主に女性の仕事だった。



ショイ桶 大正時代

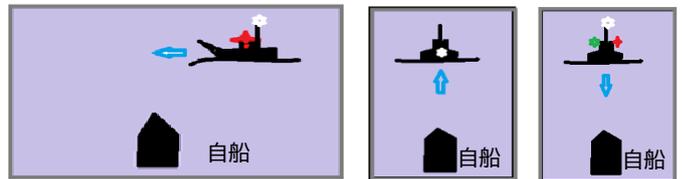


泊浜の様子 大正時代

31 ガス灯:炭化カルシウムと水を反応させ、発生したアセチレンガスを燃焼させるランプ。昭和初期まで、船内に棒を立て、つるして手元を明るくして使われた。



32 航海灯:海上衝突予防法による船舶に設置される灯火のこと。色・位置・明るさなどは世界共通で、左が赤、右が緑という灯火の色は航空機も同じ。赤色灯が見えたら右に回避。



航海灯の見え方

33 泊の丸木舟:ブナやカツラの樹齢160年~170年位の大木をくり抜いた完全な一本作りで、海で使用する丸木舟としては、秋田県男鹿半島の丸木舟と共に、日本に残る最後のもの。主に岩礁の多い海岸での、冬のアワビ漁に使用した。漁師自身が山に入り、大体の形に彫り込む船作り(フナウチ)をし、里に下ろしてきて、最後船大工に仕上げてもらっていた。明治から大正にかけて多く製造された。昭和30年代には、舟用の大木を確保できなくなり、見られなくなった。



※昭和38年「国の重要有形民俗文化財」指定

34 カッコ船(ムダマハギ):丸木舟より軽く波が入らず波に乗りやすく、多少の波でも操業できた。明治以降使われるようになる。船底部にムダマと呼ばれる材を用い、舷側板(棚板)を取り付けている構造で、ハギは、接ぎ合わせ造船するという意味。

始めカツオ漁に、カツオが獲れなくなり大正から昭和にかけては、イカ漁に使われた。カッコ船の後に川崎船が使われた。昭和50年代(1975~)には、小さく一人乗りとなり、磯漁に使われた。細めの車樫(クルマガイ)を使っていた。コンブやワカメ漁は大きめの船で、ウニやアワビは小さめの船が使われていた。

